



「自分の絵を観ると不思議な気持ちになる」

1976年に福岡県糸島市志摩の海辺にアトリエを構え、以来、毎年夏から秋にかけては糸島で制作活動をしている。

「本日は私の絵にタイトルはないんです。自分の手から離れるその時に『ああ、こういうものなのか』と思った言葉をつけているだけ。でも、多くの人は絵を観る前に、タイトルを読んでしまつて、『題に月とあるけれど、月に観えない』と、気にしたりするんだな」

「どんな作品になるのか、どう描くのか、今でもキャンバスの前に立たないとわからない。できあがった自分の絵を観て『奇妙な絵を描くなあ』と、ぼかんとすることがあるという。」

「本人は自分の作品のことはよくわからないものだ。自分の顔を観ることが決してできないみたいだね」

大正、昭和、平成、令和を生きて、移ろいゆく時代を観てきた野見山さん。

「100歳まで生きてきて、日本の生活様式もずいぶん変わった。昔はもっと知らない人にも親切だったと思うし、一方で、金封に包む紙幣の奇数偶数を気にするとか、ちつとも変わらないところもある。『このまま長生きしたら、世の中がどう観えるのだろう、観てみたいな』と、思うんだ」

#### Information -

##### 100歳記念 すごいぞ！ 野見山暁治のいま展

●2021年1月9日(土)→18日(月)  
日本橋店本館8階 ホール  
●2021年3月3日(水)→15日(月)  
京都店7階 グランドホール

##### 絵描き、道楽、続けて百年、 野見山暁治です

●2021年1月9日(土)→19日(火)  
日本橋店本館6階 美術画廊  
●2021年3月3日(水)→9日(火)  
京都店6階 美術画廊  
●2021年3月24日(水)→30日(火)  
横浜店7階 美術画廊

▽ 高島屋の美術  
▽ ART INFORMATION



のみやま・ぎょうじ 1920年、福岡県生まれ。画家。'43年戦争のため東京美術学校を繰り上げ卒業。応召の後、病を患い、療養所で終戦を迎える。'52年フランス政府私費留学生として渡欧（'64年まで滞欧）。'72年から'81年まで、東京藝術大学教授を務める。2000年文化功労者顕彰、'14年文化勲章受章。文章でも活躍し、著書に『四百字のデッサン』（日本エッセイスト・クラブ賞）ほか多数。



『忘れない』  
(37.9×45.5cm 2020年)

ARTIST  
CLIP

No.45



洋画家  
野見山 暁治  
Gyoji Nomiyama

今日も明日も  
描き続ける

「絵は『このように観なくてはいけない』と強制しないもの。芸術なのだから、観る人の本能のままに感覚的にとらえればいいんです」

そう語る野見山暁治さんは、大正9年生まれ。100歳となった今も、毎日絵筆をとり、精力的な創作活動が続けている。

戦後、フランスへ留学すると滞欧中に『岩上の人』で安井賞を受賞。1964年に帰国後は創作を続けるかたわら、1972年から東京藝術大学で教鞭をとり、後進の指導にも尽力してきた。

その作品の魅力は、豊かな色彩と奔放に繰り出される筆致、そしてストローク。近年、ますます自由で過激、自在な作風になっている。

文筆家としても知られ、多くの著書を執筆している野見山さんの、作品につけられ